



学校だより

令和5年 8月28日

横浜市立榎が丘小学校

～豊かにかかわり合い、しっかり学ぶ、心身ともに健やかなえのきの子～

TEL 045(983)1067 FAX 045(983)5284

HPアドレス <http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/enokigaoka/>



時代とともに…

校長 仲川 美世子

今年も暑い夏休みでした。じっとしていても汗が流れる中、甲子園では神奈川代表が優勝、そしてハンガリーでは日本時間の今朝まで世界陸上が開かれていました。そこでは、世界記録や日本記録の更新が続き、人間の力の可能性、限界に挑むことのすごさをまざまざと感ずることができました。

同じ記録でも、「猛暑日」の日数が記録を塗り替えていることは、あまりうれしいことではありません。この「猛暑」という言葉、果たしていつからあったのだろうと校長室にあった古い国語辞典を調べてみました。「猛暑」という言葉はちゃんとありました。しかし、「猛暑日」というのは2007年に気象庁による予報用語の改正によって登場したようです。そして、気象庁に残る記録によると、1875年にも気温が35度を超えることあり、その後も周期的に暑い夏が訪れていたことがあったようです。ですから、「猛暑」という言葉はかなり以前からあったものの、気温が高くなるが増えたため、「猛暑日」という言葉がきちんと定義されたようです。厳しい暑さの呼び方は他にも「猛暑」「酷暑」「炎暑」「極暑」などと種類があり、その違いや順序性はないことを改めて知ったのですが、まあ、言葉を並べるだけで暑さが増してしまいそうです。

最近では日本気象協会が40度を超えた日のことを「酷暑日」、夜間、30度を下回らなかったら「超熱帯夜」という呼び方をつくったそうです。これらが当たり前に使われることなどないといよいと願いつつも、言葉というのは時代によって、状況の変化によって変わったり、新しくつくられたりしていくものだという事も再確認しました。

さて、そのように暑い中ではありましたが、感染症対策に以前ほど気を遣わなくて済むようになった夏休み、ニュースで「〇年ぶりに開かれたお祭り、花火大会」というのを多く耳にしました。大勢の人が夏のひと時を全身で楽しんでいる様子が画面の向こうから伝わってきました。その賑わいは、地域のお祭りでも見られました。青葉台小学校を会場にした「桜台祭り」と青葉台第二公園で開かれた青葉台二丁目自治会のお祭りです。どちらもかつての開催時にはこんなに人がいたのだろうか？と思うほど、たくさんの人々が本当に楽しそうに久しぶりの夏の宵を過ごしていました。その中には大きくなった卒業生の姿もあり、運営側には日ごろからお世話になっている地域の方々はもちろんのこと、家族連れや高校生、大学生ぐらいの若者の姿もありました。

今回会った卒業生たちも、今は地域の若者です。私たちが今日の前で育てている子どもたちもいずれは地域を支える力となって活躍してくれるはずです。時代とともに変わっていくものもありますが、何を楽しいと感じるか、そのために誰がどのように動くといよいかという根本的なところは変わらないでしょう。時代の流れに翻弄されるのではなく、その流れに身を任せたり岩陰にとどまったり、時には、逆らってみたり、時代とともに自分にふさわしい生きかたを育てることができればと願う、涼しい校長室からのたよりでした。